

△ △ △
杉野祐毅氏の『色彩教育』に曰く、太陽光線を分析すれば赤、青、黄の三色を得る、これを三原色といふ、これは七色（紫、藍、青、緑、黄、橙、赤）中最も光の強い部分から三つを選んだのである、この三原色中の二色をとり出して混合すれば更に異なりたる色を得る、間色といふのがこれ、混合によつて橙、緑、紫の三色を得るその正しき割合は、黄の三分と赤の五分とて橙色。黄の三分と青の八分とて綠色。赤の五分と青の八分とて紫色となる（小學校）

△ △ △
生方賢一郎氏曰く「女子が男子よりも繪を描くに不適當なる點は、多くの時間を要し過ること、姿勢がわるく眼を畫面にまて寄せること、道具の取扱が叮嚀でないこと、鉛筆で下繪を作る時に力を入れ過ること、應用の利かぬこと、細かい處にばかり注意して大體の比較がとれぬこと、依頼心が多いためか彩色の時繪具の調合を一々教師に聞きたがることなど」（教育實験界）

△ △ △
石井柏亭氏曰く「油繪具と水繪具とを比較すると何れも其長短を有して居る。材料の堅固といふ點又其厚重なる迄に於て油繪具が優れやう。併し其透明なる點明快なる點に於ては或は水繪具が優れやう」（新潮）

◎方寸畫曆

本年の日曜表に添へて百穗、柏亭、未醒、鼎、白羊、恒友諸氏の筆になれる十二枚の着色石版畫あり漫畫帖として好事家の喜ぶものなるべく、製本また頗る氣の利たるものなり（定價二十錢、本郷千駄木林町方寸社發行）

◎日本名勝寫生紀行 第二卷

神田表神保町 中 西 屋

四六版二百十五頁定價金三圓五十錢

體裁第一卷に似て更に美を極む、挿畫の筆者は岡野榮、中澤弘光、山本森之助、小林鍾吉、跡見泰の五氏その種類は鉛筆畫、鉛筆淡彩、毛筆淡彩、色鉛筆、ペン畫、水彩畫、油繪等、版は寫眞版、木版、寫眞二色版、四色版等にして其數實に八十餘、他に二色刷のコマ繪多數を挿めり、場所は利根川、銚子、房總半島、箱根舊道、口伊豆、奥伊豆等にして紀行文は總て小林氏の情趣多き筆に成れり。

此書を手にする時第一に感ずるは出版者の營利を目的とせずして發行せられし其義舉にあり、色版かくの如く多數に、加ふるに體裁、用紙、活字の鮮明、手數多き全誌面の二色刷等寸分の隙なき注意は、著者よりもより多く出版者に向つて感謝の意を致さざるべからず、第三卷は京都及琵琶湖沿岸なりといふ、吾人はその速かに出版せられんことを望み、同時に此企てのため日本全國のみならず、東洋否、全世界の寫生紀行を完成せられんことを冀ふ。